事情

村井靜馬編輯

明治太平記

三編

下

へ遠14
2504
26-6

門へ遠14
2504
26-6

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記

全

東京書林　延壽堂　裴兌

明治太平記三編巻之二

東京　村井静馬記

余程ゟ會津家ゟ既ゟ降伏ゟ及びたるゝ夫より前ゟ二本松家も官軍ゟ就く帰降かし其後まゝ五日を過て仙臺南部庄内以下自餘の諸藩悉く降伏ゟ及び〻城并びゟ兵器の類ひ残官兵ゟ献ぜしゝ〻奥羽の騒乱平らぐり是より先秋田藩ゟ〻時く〻賊軍ゟ圍まれあぐゝ孤立しく志気を変ぜず大義を唱へて近隣の

諸藩を教諭せし
一領名刀一口を賜
の兵士等は寒地に
思し召ものく毛
且會津の城退居
食糧の備へとて
せし鎮將府より
人に各二人口宛の

勸めく産業を勤
もる者はおいく雖
ども感涙袖に餘
天皇東京に臨幸
賊徒鎮定せし
叡感斜めなる帥の
に金を賜ひまく群
諸侯の所置を議せ

大同小異なりと雖も其罪大抵均しくれど至って厳
刑に處せらるべし就中會津に於ては罪の甚しき
なれば死を賜ふも尚餘罪ありと何ぞ奏したりし
うど天皇仁恤を垂させらるを非ず寛大の御所置をもて
仙臺以下二十餘藩主の死一等を赦しく各藩に幽
し其領地三分の一を削りく同姓をして封を襲さし
め會津を又死を宥めらるく父子俱に幽せらるを
翌年陸奥斗南の地にて三万石を賜ひし又彼上野

の戦争に脱るを奥羽に至りし輪王寺の宮を諸
藩帰順に及びしを支もなく帰られしを
西京に遣はして伏見の宮に
の如き脱将の面々も夫々幽閉せしと此頃陸奥
の国を五國に分ち磐城岩代陸前陸中陸奥と
又出羽の國を二國に分ち則ち羽前羽後とせり斯
の如くに所置せられく奥羽の地い畧平定せしに又
函館に事起れり其故を奈何みるに暴に大鳥

大鳥圭介
等會津を
去て仙臺
の海兵よ
投ぎ

圭介等徳川氏の餘の脱兵と倶に総野二州の間に於て屢官軍と接戦せしが遂に戦ひ利あらずして後會津城に来り加へて一方を預りて防禦の策を聞らすれども既に勢ひ窮まりて降伏するに至りしうべ圭介等は這所を去りて稍仙臺まで趣きしに此藩も亦軍威衰へ帰降あらんとする時なれば倶に事をとべ図りぐく奈何をせんと思ふ折ふし既に榎本釜次郎等も開陽丸

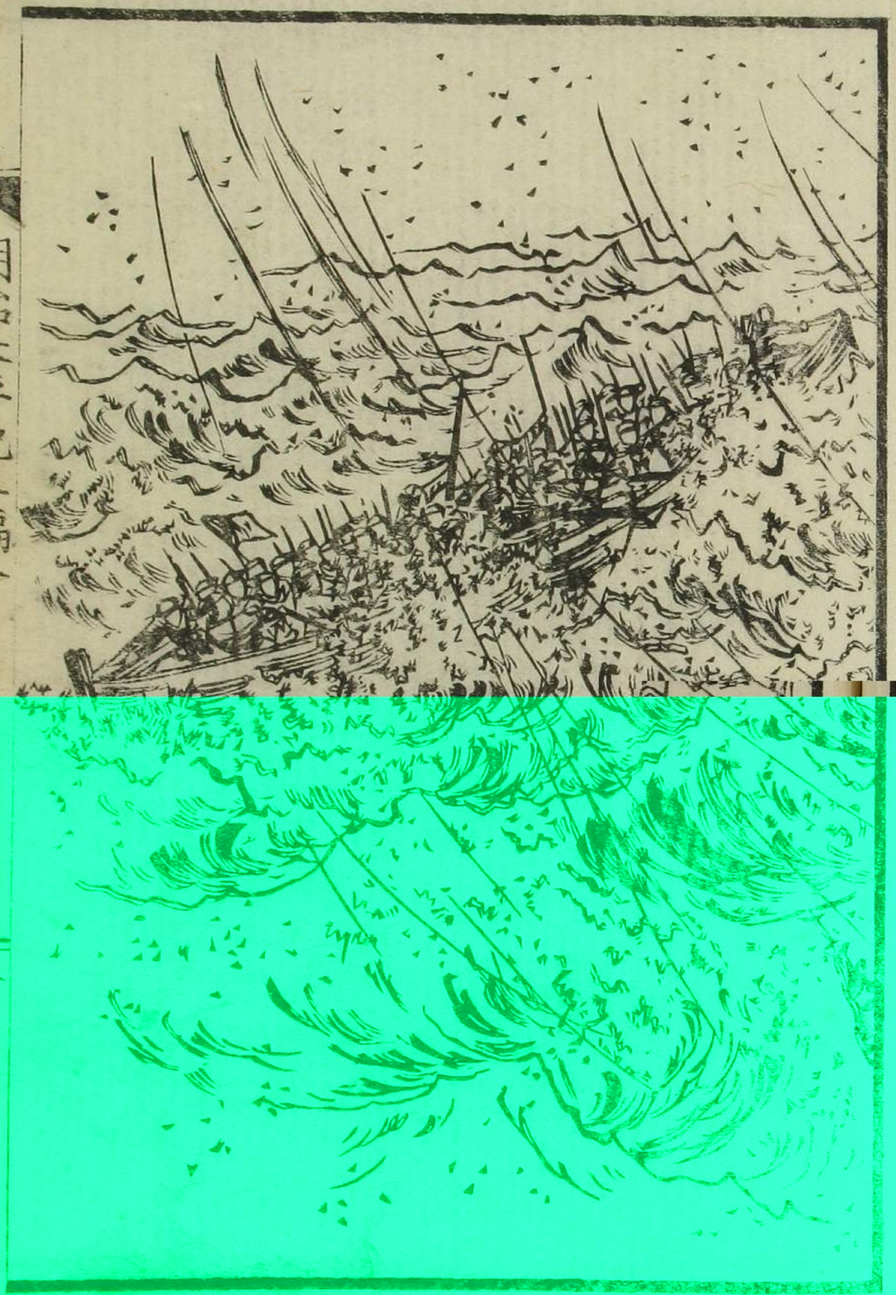
回天丸蟠龍丸神速丸長鯨丸大江丸鳳凰丸の七艘に乗りて品川海を脱走なし途中に於て風難ありしも左右して乗抜つ漸仙臺の地方に至り奥羽越連合せし賊兵等と謀計を合せ事成挙んと為さうし會津その餘の藩々も咸降参に及びつ大鳥以下の面々も此地に退き来りしうべ此うへは奥羽の地ふたゝび再挙を謀る支懐なれば亦函館を乗り取て彼地を據りく事を為さんと大鳥等甲乙

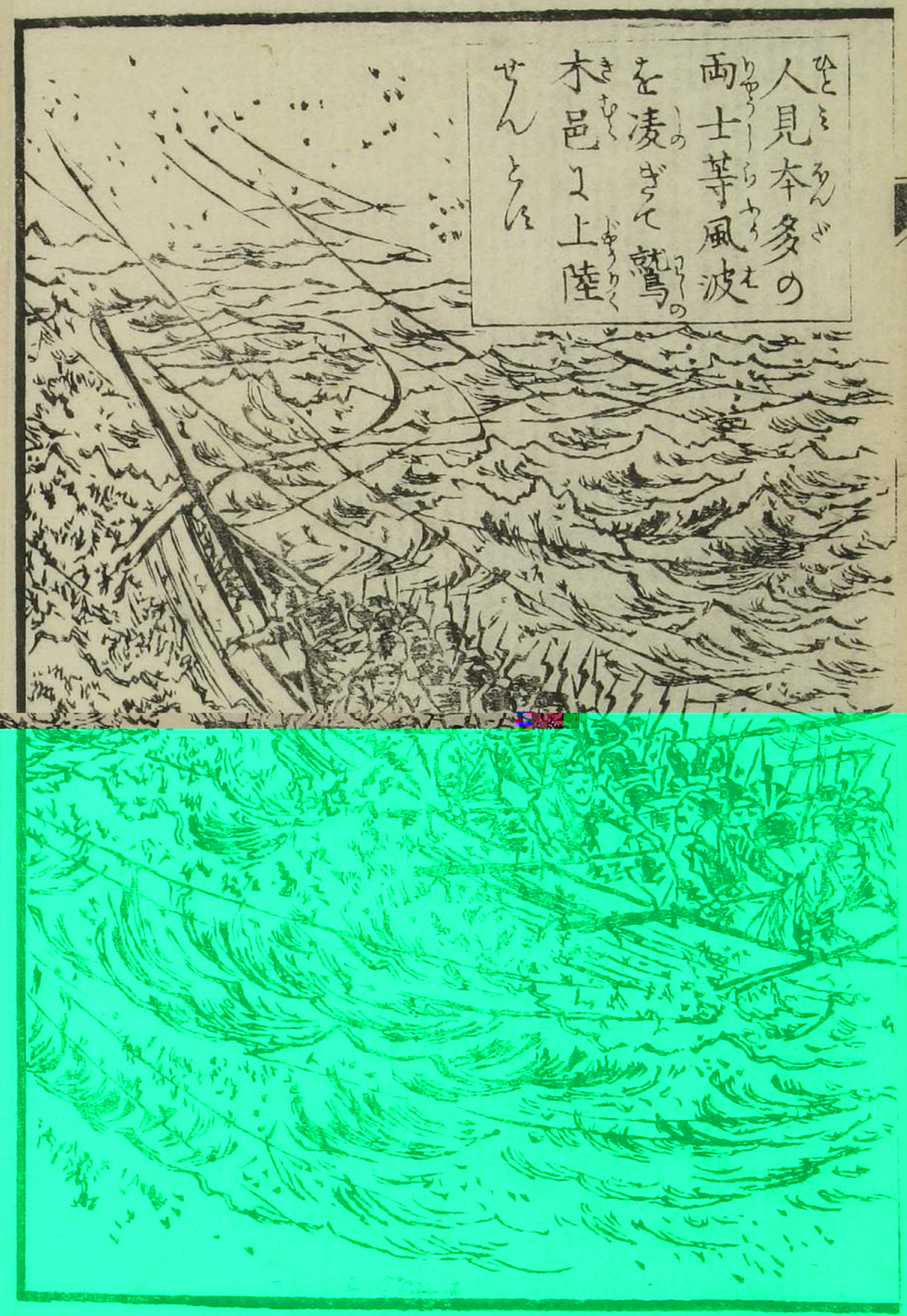
件の船に乗らしめ総勢二千五百餘人此地の港を
發帆せり這は是十月九日なり斯て七艘の軍艦は
荒波を凌ぎて走らせつ此月の十三日に南部領宮
古港に入り各船薪を積入れたり所は仙臺より此
邊りは石炭の乏しきに薪を以て代へ蒸気
の運動を為せるなるべし備七艘とも十分に是等
の準備整ひしかば直ちに所処を出船して同月
廿日に南蝦夷なる鷲の木村とふに着せり豫て

榎本等船中にて相議して言へらく我輩不意に
函館に逼り知府事以下を追退け此地を奪ひ取ん
とせば事速に運ぶべけれど斯ては名義正しか
らず固より我々国を脱して身を置くべき所
なし仍て此地に止まつて開墾をなすと言ふを主と
て知府事に哀訴に及ぶべし然りとて容るゝに許
容なるべきやうもなければ彼を整ひ亟きに至りなば兵威を
示して逼るべしと評議一定為たりしかば上陸をさんと

なる程より此日正午の頃より〳〵卒なる風荒浪立
飛雪烈〳〵降出せべるく陸より寄付げるを既より
命を被りたる人見勝太郎本多幸七郎等ハ兵士三
人を率へおのく哨船より乗りて風波を凌ぎて
陸あせべ又大鳥圭介等もまた援を做んと
兵若干を引俱〳〵続いく陸より上りたり此とき知
事清水谷侍従とくるへ函館を少〳〵離れ亀府
五稜郭とくへより在り〳〵鷲の木村より急使来る

即今徳川の脱艦七艘此浦より着岸あり追々より
陸〳〵民家より旅宿を求むるも言ひ或ハまた脱
等人数を引俱〳〵此所へ程なく襲ひ来るなど注進頻
なり〳〵清水谷なる驚愕せるく猛可より防戦
指揮より及ぶより此時既より松前大野小倉福山津軽
の藩兵此地より在留為たり〳〵先大野村なる所
本陣と定めて夫より諸口へ兵を分署〳〵今も賊
兵襲ひ来らば討走らせんと構へたり今程より脱兵




人見本多の
両士等風波
を凌ぎて鷲
木邑に上陸
せんとす

ある人見本多の両名ハ使節の任ニ関れば兵隊三十人を引俱して鷲の木邑より函館まぐハ十里ニ餘る道ある成頻ニ路次を急ぎしもどきれ十月の末ゆゑ暮短うして頃ちれば途中ニ於て日も昏つ稍初夜過ぬと覚しき時大野口まぐ至りニ此手ニ對ひ津軽の藩兵敵ち寄せんと思ふまぐ二百余人の兵をもて矢庭ニ撃てかゝり人見等両士ハ使節の旨を辨解あらんと思へども

敵より放つ弾丸の最も烈しく飛来れバ中ハ一言の問答ニ及ぶべき虚間もなく這方も兵士ニ指揮して俱ニ砲發ニ及ぶ僅ニ三十余名をもて二百餘人ニ當る事故必死となりて働けども之を支ゆるを恐れ甚ざ危く見へたる折しも應援の人進ミたる大鳥圭介等の一手の軍兵少し後れて来たりしが此砲声を聞くニ及ぶ偖ハ人見等ガ一行ハ函館まで至らざるニ既ニ途中ニ敵ハ来て接戦あるを

覚へたり固より僅ゝの小勢ゆへ戦ひ危ふるべき筈
救はぎんばいのるべゝ/\と総軍残らず走至りて勝誇り
たる津軽勢の横合よりして撃て掛まべきよ気筈
得し人見本多も又我が兵を盛返しく手痛く敵
よ当るまぞ津軽の兵士ハ賊軍を小勢と侮り居さ
りしよ敵よ新手の加りたる筒先最も鋭されバ須
臾ハ堪へ戦ひ/\遂よ堪へず敗走しく大野の
陣よ逃入る筈脱兵ハ尚勝よ乗じく追逼らんと為
たりし筈大鳥制しく長追ひせず軽く躬方を引揚
く要所を選んで陣取まり這を夜軍とひ殊よ又
地の理よ委しゝ移ぞるべし而しく戦争の
趣き筈鷺の木村へ報知るまぞ永井玄蕃頭筈
もゞ榎本以下の面々も既よ上陸みしく居るが
此注進を聞くよりも斯の如くよ官兵より我が情
実をも問糺さば砲撃のその勢ひ/\ハ迚も使節
を送りたりとも願意の整ふべきよ/\ハ速よ

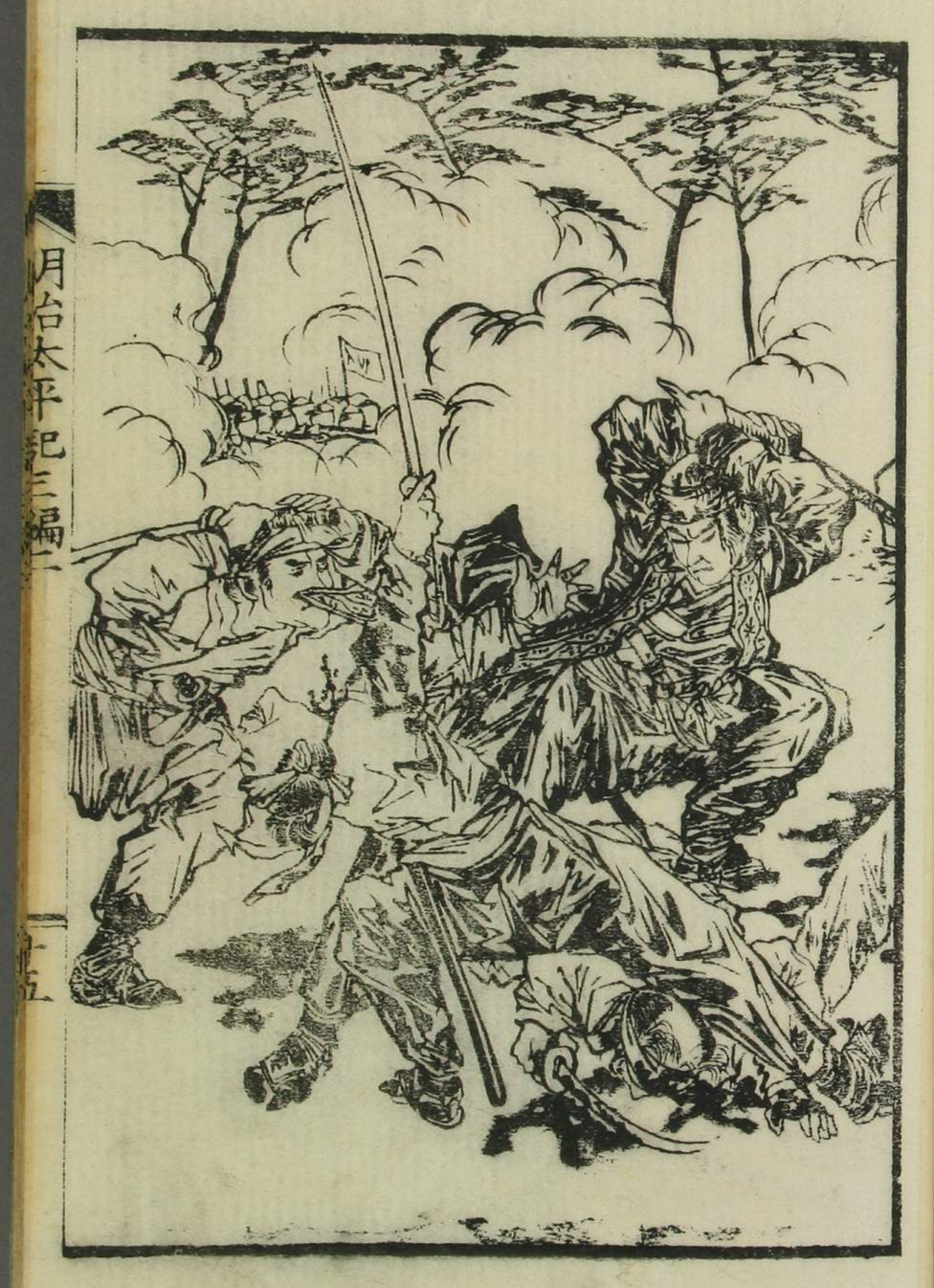
兵を進めく有無の一戦に及ぶべしとて熊谷松岡四郎左エ門古屋作左エ門等の面々に許多の兵を率ハせく大野口へと進めり別に土方歳三等に一手の兵を従ハしめく川汲峠の間道より七重村へと赴かせり余程に大鳥圭介ハ要害の地に屯して敵の挙止を探り見るに既に大野の陣営に津軽の兵隊退きく福山大野の藩兵等ゲ入交りて護る其状最も厳重なるゆゑ大鳥猥りに攻蒐らぎ先づ

鷲の木に一左右を決て事を成んと思へる折ゝ松岡古屋の両名ゲ精兵許多引俱して此手に来り加わり永井榎本等ゲ議する所迚も尋常の支ふそハ整ふべきの勢ひなゝ孤ゞ一挙に兵を進めく函館を乗取れとの指揮あるに依演るゆゑ大鳥ハまた一議に及ばず余ゝゝゝゝ総勢大挙しく大野の陣屋を攻破り其機に乗じく五稜郭まで逼りて事を決せんと直に部署を定めゝ砲手を先に進めく大野の陣所へ攻

脱兵進んで官軍の陣営を襲撃す

蒐まべ福山大野の藩士等も左右より備へくれを邀へ互ひに砲戦に及ぶ程にそれめい官軍兵備を調へ善く戦ふと見へたるが兵を遣ふに妙を得しと音に聞へし大島が機に臨み変に應じて先手に進み後陣に回り自ら八方に下知して衆を激まし戦ひしもれば官軍大いに乱れ立て死傷の者も多くして故遂に敵の隙を得て陣屋を棄て敗散せり去れども仍て脱防等ハ忽ち陣営を奪ひ取り姑く這所に息を休め五稜郭へぞ進み寄て慥と土方歳三等が一隊ハ川間道より辿る此道ハ最遠くして彼鷲の木館まで三十里に餘るの殊に嶮岨の故に大砲を率く支悚ち僅に小銃槍劔など各得物を携へて七重村に至りて折から此口の居たりし一手の官軍遮り止めて頻りに大砲を放ち撃たる勢ひ最も烈しければ賊兵ハ辟易して歩も進む支を得ず稍逃足に成りたる處に

手の隊長大岡甲次郎諏訪部信五郎の二人名ハ此形状より憤激しく汚名を躍如と言ふよりも疾く刀を揮ふの挙動る我より続け事ともせず真一文字より斫中へ飛び来る砲丸と如く當るより任せ薙ぎ入り宛然白刃の暴脱兵等ハ物の数ならず競ふて砲を敵を出ずるを得り振て敵に對ふて奮戦す或ハ刎をうちくて互ひに勇を震ひ手を敵も躍り乱れ負へる者断ふも中大岡甲次郎ハ敵中に深く入りしく奮戦よ及ひしゝ身ふも数ケ所重疵を被り今ハ斯よと思ひ近寄る敵を斬刻れて死まるるぞ諏訪部も劣らぬ力びけく自ら敵許多討取りて遂に是も痛傷受の勢ひに官兵甚ぎ辟易しく討死せし程に此両雄脱兵手痛く攻蒐れバ此手も崩れく逃出せ何処も見えず立たる其處を追ふ程に



大岡諏訪
部の両雄
七重邑よ
奮戦せ

清水谷侍従ハ既ニ五
配ス〻防禦の指揮ニ及
〻ク屢敗軍の報ハ
ゝ固ク奥羽平定の
思ひ設けね支ある故守
兵不意ニ襲来セ〻勢ひ
小勢ニ〻ク噛止んと恢ふ
急ニ援兵を請ハ大

ぞと言ふ支ハ〻ト
まで退ク此頃當所ニ在
借て津軽の青森ニ乗渡
脱兵ニ追立ラレ奇〻ク五
水谷侍従ハ退去セラレ
失ひ今ハ此地ニ姑ク止
先を争ひ〻ク函館ニ走り
英國の船を頼テ是等ハ

らぬ脱兵ども五稜郭より押寄せ来りて攻破らんと競ひかゝるを敵兵更に見へぎれば備ども防方の武威怕まく疾くも脱し去たるあらんとあなく勇み歓ぶ

輙く此郭を奪ひ取りし凱音をあん揚しとぞ這ひ是廿六日あるべき余ばまさ榎本等ハ嚮に陸軍の兵士等い本道及び間道より二手にあして繰出させしかば敵の挙止の測らるべ心元なる所やあるべ尚明天丸蟠龍丸の二艘に海軍の兵士を乗らしめ鷲の木浦を発艦させしが此日廿六日函館の港に入りしにより清水谷を始めとして諸藩士退去の跡なきあるべ兵士等直ちに上陸ふし砲臺及び蔵庫者を奪ひ取あるに日章の旗を揚たり然る処へ五稜郭より脱兵来り會せしかば是ようやく持場を定め各所々々を戍りしに次の日廿七日秋田藩軍艦に尚尾丸と歸まる船兵庫に航海あさんとて今賊兵の函館に向ひしとの知らせ入港に及びし彼脱兵天

と見るゝを船將薩州藩田島慶藏土州藩井上干城及び英人二名在りし紙鳶に上陸なさしめく其船を奪ふと言ふ恁て此月晦日よりゝ彼の鷲の木に殘り脱兵回陽丸以下の五艘に打乘りその浦を出帆し次の日土月朔日函館に入港せしに祝砲廿一發を放ちく此地の所有とありし紙賀し假に永井玄蕃をして函館の奉行とふし居留の外國人に告ぐ共に事務を裁斷せんと約し又米錢を市在に散らしく大

いに人心を收めたり斯回りて後脱兵等ハ五稜郭に會合しく相議して言へるゝ既に知府事等此地を去りて青森に退く支必ず藩々の兵を募りて再舉を計らん為なれど今より援兵徒集ゝる事速ならゝ運ぶもの是等の兵の向ハざる間に松前藩我兎も角も所置なん支急務なり然るに此程五稜郭に攻寄せる時に〳〵松前の藩にて櫻井恕三郎とゝる者我に降参

倣ひ渠に方畧を言含め宜しく藩主を遊説せしめ彼藩我に同盟せば躬方の幸ひあの上ゆゑ孫ど十ゐ七八ゐ我に抗せんとまるゐあ然る時を速うに彼城を攻落し後ろを安くせばんだゆゑび左ゐも右ゐも試ゑ渠を使節に遣ハし見んと躯て櫻井を呼出し和殿躬方に降伏して德川家の為ゑも忠義を尽さんと思ふれゐあ松前福山の城に至り戎輩の誠意を説き冝しく

あるゞ既に前の中納言水戸烈公卒去せられし其後ゐあの市川等威を振ひ國政を執りその比正義黨と喚ばれたる藤田小四郎等憤激して故中納言の遺志を継ぎ攘夷の魁をあらんとて大平筑波の両山に籠りて專ら兵を集むるゞ市川等ゐれを藩主に訴へ既ゑ幕府より追討せらるゝに市川等も亦其兵に加ゐり藤田の徒を討破り又武田耕雲齋等ゞ城に入らんとまるゐ拒きて姑く接戦に

及びて之を討走らせしゝが弥威権を震ひしゝ後
又武田の餘黨起りて一藩正義に復せんぞ市川朝比
奈の両名い奸黨の兵四百を倶して越て本國を脱走
し越後口なる賊軍に加わり屢官軍に抗戦せしゝ
長岡の城陥りて賊兵漸次に軍威衰へ防戦かなひ
がたきが故に是非なく會津に帝保しに此城もまた勢ひ
尽て降伏の色を露せしゝが越て市川朝比奈等を
其黨數百名を率ひて若松城を辞し去りつ再び

備せり又脱兵の方にて怨三郎を使として福山へ
遣はせしゝが渠が返事を安閑と手を空しくして待つ
時を機會を失ふ支もなるべし敵の挙動を探らんと
兵を境に出し置て彼藩我に同意せず倘抗戦する
勢ひなるべ速に城下に逼りて勝負を一時に決
まゝしゝて賊将土方歳三に七百余りの兵を授て
尻打村と言ふ所まで進ませて陣を布かせ又同日
蟠龍艦に海軍の兵を乗せて函館港を出帆させ

福山の湾中に入り敵砲を発し、あるは海陸の兵と
ともに大庭より城を攻落さんと船中ひめくり陸に登る
陸地の軍士を用ひ
是より勝敗及び官軍の事は東戦
地を回復あるの節は編を改めて詳に記すべし

明治天平記三編巻之一終